別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第八十号

「郷土史研究」誌
通算第百二号

昭和四十七年一月廿六日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴方

研究

四教堂を懐う

佐伯史談会
会長 高木嘉吉

年頭の数日間、私も人並に正月の行事に追われて忙しく過ごした。ふと「三日書を読まざれば心空し」の古人の言葉を思い出して、古語我を欺かずの感慨にひたった。そんな時に、四教堂とそれに関係した先生達のことを話してほしいと、若い学生の訪問に接した。前日に都合をきかれて承諾したので、一挙だけ材料を整理する余裕があった。と言っても此の時間は、論語を読み返すことに使われた。

それは、四教堂と命名した原典をたしかめるためであった。増村隆也先生の『佐伯郷土史』後篇の「四教堂と佐伯文庫」の所に、「四教堂の名は論語に、四つを教ゆ行文忠信とある故事によって名づけられたものと云う」とあるのを参考にして忙しく頁をめくったわけである。

論語は、学而第一、から 堯曰第二十までの二十章から成っているが、第七章述而第七の中に求むるものを見出してほっとした。それは

「子以四教、文行忠信」

の八字であった。一度これを確めたいと思いながら、莽日を送って今日に至ったことが恥じられた。増村先生の記述は、「行文忠信」と行が先になっているが、誤植であろう。

文行忠信は、文を学び、行を修めて、忠信を存する、と解読すれば一応無難であろうが、以下少し註を加えて四教堂開設の理念をさぐって見たい。

孔子は修養の目標として仁に到達することを掲げ、修養法として博文と約礼を説いた。

博文は博く文を学ぶことであるが、当時としては詩経、書経に代表される詩書を学ぶことになる。

約礼は、博く学んだことを実際に行って、中庸、和、敬虔の徳を身につけることである。

博文と約礼をあげたことは、知行の合一を求め

本号内容

研究 四教堂を懐う（高木嘉吉）……一
随想 年頭に思うことを（伊賀理作）……二
研究 氏利歴代の名前について（佐藤貫一）……三
随想 春を待ちつつ（羽柴孔）……五
研究 羽出浦庄屋文書(九)安部外右エ門……七
―藩家判御改仕書物之事―
記録 佐伯四国霊場巡詩（佐藤貫一）……一三
資料 佐伯と国木田独歩（山本保）……一五
―富水尾南日記に見る独歩―
記録 年頭初歩きの記（羽柴孔）……二〇
昭和四十六年分佐伯史談総目次……二一
報告 昭和四十六年分会計決算書……二二
記録 惟岳に登る……二三
最愛 山田先生を悼て、外

たことでもある。前述の文行忠信の、文は博文であり、行は約礼である。

博文約礼の語は論語の中で所々に見られる。顔回の述懐として「夫子は我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」とあり、又伯魚への戒めとして「詩を学ばざれば以て言うことなし。礼を学ばざれば以て立つことなし」と言っているが、前者は博文をすすめたものであり、後者は約礼を教えたものである。顔回が仁を問うたのに対して、「克己復礼を仁と為す」と答えているが、復礼は即ち約礼であり、又約礼の一端として「非礼視る勿れ、非礼聴く勿れ、非礼言う勿れ、非礼動く勿れ」とも言っている。

忠信は誠意誠心と解すべきか、博文約礼で修養を重ねても、それが名利を求むるものや、世間体をつくろう等のものでは駄目で、誠意誠心から出るものでなければならないと戒めたものである。

高標公が四教堂と命名した意味も、此の博文約礼忠信を教学の理想として、藩の子弟の教育に当ることにあったと思われる。

四教堂は安永六年（一七七七）十三代高範公の時に開校から、明治四年（一八七一）十三代高範公の時に開校する迄、百余年間佐伯藩教学の中心として、藩の子弟を教育し幾多の人材を育成した。しかし開校以来又百余年、今や四教堂を偲ぶものは殆んど湮滅して、其の名も郷人に忘れ去られようとしている。ただ一つ、当時四教堂に掲げられていた、高標公の題字の入った、狩野甲信筆の司馬温公水鉢をこわす画の扁額が、佐伯小学にうけつがれて校長室に掲げられているのは、うれしいことである。

四教堂の礎って立った、博文約礼忠信の教育方法教育理念は、今日の教育から考えても、いささかも遜色のないものと思われる。

私達は四教堂の名と共に、その教育の由って来たる所を伝えて、郷土教育の進展充実と、人材の育成に資したいものである。

（以上）

随想

年頭に思うこと

会員　伊賀重雄

私は去る大晦日、紅白歌合戦がすんでから、除夜の鐘をつきに西運寺に参詣しました。小高い参道から見る弥生町中心地の夜景の美しさ、今まで見なれたわが住む里の異なった美しさを発見した感じでありました。

西運寺の鐘楼に辿りつけば、数人の青年達が威勢よく鐘をついていました。鐘の音は近くから遠くに、遠くからうようにひびき伝わり、夜景の美にとけこんで、静寂の中に人々の煩悩を功徳する力をもっているようです。

逝く年、来る年、本当にあわただしく流転します。この中にあって、私達はあわただしい世の中から、一度自分を見つめて見たい。逃避するのでなく生活の中での自己再発見であります。

郷土史研究もそうした意味での生活の一部であると思います。佐伯史談が百号という目標を達成し、これからはその集大成と、地域にある未発見の資料の発掘調査が、全会員に課せられた使命でもあります。後世に確実な史料を、より多く届けることが私達グループの仕事であると思います。これからの研究も一人一人の研究でなく、